鈴木　伸太郎

魚の眼を獲得する方法について

現実を捉え直す手がかりとしてのコミュニケーション

はじめに

現代社会に生きる人間が困難を覚える理由は様々だろうが、いずれにしても、困難を乗り越えていく過程でコミュニケーションが一つの決定的な鍵となっていることを本稿で示していきたいと思う。ただ、そう述べるからといって、それは必ずしも、都市化した大衆社会に埋没した個人が孤独に苛まれ、隣人とのコミュニケーションを求めている、といったことばかりを指すものではない。

確かにその場合もコミュニケーションが鍵となるとは言えるだろう。もちろん孤立化して孤独になった個人は、概ねその孤独の程度に応じて、生きるのに困難を感じるだろうし、他の人間とのつながりや絆が人間の孤独を癒やすことは事実である。しっかりと築き上げられたコミュニティーの人間関係の中で支えられることで、個人個人が生きる意欲を見失わずにいられる確率が高まると筆者も考える。コミュニティーの人間関係にコミュニケーションが介在することは自明である。人を支える人間関係というものは、頻繁で緊密なコミュニケーションなしには作り上げることができない。コミュニケーションのネットワークを見失ってしまうことが人を孤独にするのである。

ただ、人間関係やコミュニティーが孤立や孤独の問題を「解決する」という思考に慣れてしまうと、他の人間と緊密に関わり合っていれば生きていくのに支障がないというような錯覚に陥ってしまう。他人と関わり合っていれば人生の問題が解決するというような予定調和があれば苦労はない。筆者の考えでは、孤立や孤独からの脱出は、人が人らしく生きるという課題の出発点に過ぎない。人間関係やコミュニティーがありさえすれば人は幸せに生きられるというわけではまったくない。その理由をとりあえず言うとすると、人と人との繋がりは、時に煩わしくもあり、生きることに対する新たな困難を持ち込む元にもな

る、ということである。人と人との繋がりの束とも言えるコミュニティーの人間関係は、緊密でありさえすればいいというわけではない。

1 「自殺希少地帯」のコミュニケーション

農村型の緊密なコミュニティーは、どちらにせよ現代の都会生活ではおそらくは不可能であろうが、それは狭い地域に人が集まり暮らし、あまりそこから外部に出かけていかないというようなことが、都市化された社会の構造上（相互依存関係の網の目の拡大によって巨大な規模の社会が実現している構造上）あまり頻繁には見られないから、というばかりではない。既存の（いわば農村型の）コミュニティーから逃れる自由を獲得できるのが都会生活なのであり、かつての農村地帯であっても、現代では概ね都市化の波に洗われているということの理由の一端はそこにある。固定メンバーのコミュニティーほど安心できるものはないとも言えるが、同時にこれほど煩わしいものはないとも言える。ただ、それでもなお、都会生活の中で人は伝統的な農村社会に似たようなコミュニティーを求めていく傾向もまたあることはある。同じ学校、同じクラブ活動、同じ会社、同じ職場…といった繋がり、あるいは擬似農村社会的なコミュニティーは、常に生成され続けている。

以上のような簡単な考察によっても、コミュニティーと個々の人間の関わり合いというものが単純なものではなく、むしろ両義的で相互に背反する性格を持つことがわかる。

この点で示唆に富むのは、ある精神科医による『その島のひとたちは、ひとの話をきかない』という本に述べられている、主として都会の地域ではなく農漁村型のコミュニティーについての観察と考察である。〝精神科医、「自殺希少地域」を行く〟というサブタイトルにあるように、統計的に言って自殺者が少ない地域のコミュニティーを著者は訪ねる旅をする。そのような、人が生きづらさを感じることの（相対的に）少ないと予想される地域で著者が遭遇したコミュニティーは、どういうものだったか。人間関係の（相対的に）希薄な都会人がしばしば理想として想像してしまいがちなような、誰もが暖かく親切で、人の話をよく聞き、人情味あふれるようなものとは少し違っていた。といっても、もちろん冷たく、ささくれ立ってよそ者を無用に警戒したり、他人に無関心でいたりするというわけでもない。

> 旅先で、たいていの場合は私が精神科医であることは言わない。しかし、自殺希少地域では言わされる。相手に興味がある態度を受けるので、私はあまり心配せずに自分がそうだと言える。

精神科医であることがばれるのは旅の中ではあまり心地がよいことではない。ちょっと違う目で見られてしまうことを感じるのである。一目置かれたり、心を読まれるんじゃないかと思われたり、いろいろ相談されたりして旅が楽しくなくなってしまう。

そういうものなのだが、自殺希少地域ではそんなに構えずに言える。それは相手が、私がそういう異物だとわかったとしても何ら態度を変えずに接してくれるからである。

彼ら彼女らは、そういう異物との対話にとても慣れている。

ひとが多様であることをよく知っているから、みんなと違うものへの偏見が少ない。もう少し言うと、みんなが同じだとは思っていなくて、みんな違うと思っているから、私が精神科医という異なる存在であったとしてもあまり気にされることがない(1)。

著者が「言わされる」と書いていることに注目してほしい。著者によればそれは半ば強制ではあるが、決して自分の職業をありのままに言うことが不快なわけでもない。「そんなに構えずに言える」ということなのである。面と向かって問うてくる地元の人は、単に愛想よく当たり障りのない話をしようとするためではなく、本当に他所から来た旅人に関心があるから聞くのである。そして、聞いてみて意外な答え（精神科医という職業は、ありふれた職業とは言えないだろう）が返ってきても、それによって「何ら態度を変えずに」接してくれるのである。

そもそもは、もちろん誰がどんな職業に就いていようが、そしてそれが珍しい職業だろうが、あくまでもその人その人の事情であるに過ぎない。旅人ならなおさらのことで、地元の人間の生活には直接何の利害関係もない。しかし、地元の人間がその旅人に（精神科医などとしてではなく）ひとりの人間として関心を持つのであれば、そしてその人が一定以上の年齢であれば、職業などはその人の一部分としていろいろと聞いてみたい気持ちは理解できる。ただし、聞いてみて「なあんだ」と無関心に移行してしまうなら、旅人の方も、話したかいがないだろう。あるいは、逆に過剰な反応を示して、変に持ち上げてみたり、警戒してみたりという態度をとられるのも愉快でないに違いない。そうではなく、顔貌や服装が違うのと同様に、その人間の属性の一部として平静に受け止めてもらえれば、むしろ職業などを知られたほうが気持ちが落ち着いてくるだろう。職業以外のことも話してみる気になるかもしれない。そのオープンな態度が逆に相手の安心感にもつながっていく。安心できる人間関係というものは、相手に興味関心を持ち、相手がかなり異なった存在であっても、ゆったりと相手のありようをそのまま受け止める態度が相互的に生じることを基盤にしている。そし

て「彼ら彼女らは、そういう異物との対話にとても慣れている」。

ロマンチックなコミュニティーの見方でいくと、人間同士の「絆」とか、人情の厚さとか、親切な思いやりとか、そのような人と人とを情緒的に結びつけるような事柄が大事だという観念に行き着きやすい。しかしながら、それはごく親しい人間関係を、広がりのあるコミュニティーにまで簡単に拡張できるかのように錯覚した見方である。特定の親しい間柄の範囲を超えて、人間が人間たちの間で安らえる場合というのは、警戒せずに話ができるように感じられるときである。偽り無く話す限り、初対面でも何を話しても大丈夫に感じられ、自然に自分がオープンな態度をとれるようになっていることに気づくときである。つまり、「異物との対話」に慣れているようなコミュニティーが大切なのではないだろうか。

これは単に、その人の属性が「異物」である場合に限らないのではないか。その人の様子がどこか本人の困惑や不足を感じさせる場合に、そのシグナルに敏感に反応するという態度にもつながってくるものではなかろうか。同書の著者が実際に少々不足を覚えた時の、地元の人の典型的な反応が次のような文章に記されている。

店主はコミュニケーションに慣れていた。

「櫛、売ってますかね？」

「櫛か、売ってないね」

そういうと、店主は、少し考え、

「ちょっと待ってな」

と言って奥に入っていった。タンスの中から櫛を三つ出してきて、

「どれがいいかな」

と三つの櫛と私を交互に見比べて、

「お兄ちゃんは、黒ね」

と言って、また奥に入って水でそれをよく洗って、

「これ、あげるわ」

と私に手渡した。手渡された後で、

「えっ？」

私はやや遅れて反応した。そのような様子はお構いなしに、

「これ、おばあちゃんの形見の櫛」

と言った。私は意味を理解するのに少し時間がかかったが、

「えっ？　いや、そんな、もらえないです」

慌ててそう返した。しかし店主は、

「かえって喜ぶから」

と全身を使った対話によって私に櫛を渡した。

私はさすがにそれはもらえないと思って少し抵抗したの

だが、そのような抵抗はまったく効果はなく、店主のコミュニケーション能力に圧倒されるようにしてそれは私のものとなった。

見ず知らずのただの客がそんな大事なものをもらうわけにはいかないから、私は多少抵抗したのである。しかし、コミュニケーションに慣れている店主の掛け声は、いただく以外の選択肢を失わせた。

もちろん、櫛がなければ困るから手に入るならとてもありがたく、とてもうれしいことだった(2)。

都会風ないわゆる「常識」では、親切の押し売りと解釈されてしまいそうな、一方的な行為であるが、著者は多数の自殺希少地域で何度も同様の体験をしている。即決の手助け、そして有無を言わさず相手に受け入れさせる「コミュニケーション能力」。親切さや優しさという言葉で想像しがちな、柔らかく受容的な態度ではなく、むしろ強い自我やある種の「主張」を感じさせる態度である。しかし現実的に考えるなら、助けられる側からすると、むしろそうして押しつけに近い形で強い態度で臨んでもらった方が、心理的な負担が少なく、ありがたいことが多いのである。

もし本当に必要のないことなら、オファーを受けた側がそう言えばいい。もちろんそれが額面通り受け止められるということではなく、単なる礼儀として申し出を断っているだけなのかどうか、その言葉や態度の真実味（本当に櫛は必要ないかどうか）を、助ける側は感じ取って自分で判断するということである。申し出た助けが必ずしも適切ではないということがわかり、それでも何か別の形で助けになりたいと思ったら、また改めて違ったやり方で、できることを考えていけばいいのである（あるいはさしあたり何もできない場合もあるだろう）。

同書の著者も、自らの支援の体験と重ねながら次のように分かりやすくまとめている。

あまり支援に慣れていない支援者は、「どうしますか?」と聞いてしまう。もちろん聞かなければならないことが多いのだが、どうしますか?と聞かれると、支援を受ける側は躊躇してしまう。現実的には助けが必要なのだが、相手に迷惑をかけてまで助かりたいとは思わない。迷惑なのかどうかをいつも考えてしまう。

支援を受けることは正当なことだとどうどうと伝えなければならない。互いに助け合うのが当たり前なのだとどうどうと伝えなければならない。それでも嫌だというのなら、それは本人の本物の意思だ。駆け引きのない意思とわかる。そうしたらまた別のことを考えらいい。対話を続けるのである。

この下蒲刈島でも、私たちはたくさん助けてもらった。たいていは頼んでいないのに助けてもらった。意向を聞かれる前に助けてもらった。私たちは確かに旅人であって困りごとがある。そういうのを島のひとたちはよく知っていて、だからついには、私たちが困る前に私たちの困りごとを先読みして助けてくれた(3)。

助けるというのは、そもそもこういうことなのではないか。都会生活をしている私たちの周囲にも助けることが上手な人はいる。相手の困り事を先読みして、時には相手が意識もしないうちに、相手に支援をあてがっていくことができる人たちである。先読みもできず、逆にありがた迷惑なものを押し付けたりするようでは、そもそも対人的コミュニケーションのトレーニングが足りないということになるのではないのか。助けるべきもの、あるいは助けるに足る能力を持っていて、助ける意思がある、ということだけが人助けの条件ではない。誰にとっても立場というものがあり、人に迷惑をかけたくないという社会常識も持ち合わせている以上は、他人が本当に困っていることを先読みできる能力、そして適切な援助を申し出ていると確信できる時には、相手に否と言わせない「コミュニケーション能力」が重要である。そういう場合の援助する側の強い意思の発動は、表面的には押しつけのように見えても、そうではないのである。

援助される側から言えば、自分の状況が他人に的確に読まれているということを感じないわけにはいかない。困った事態に陥ったことを隠そうと思っても読まれてしまうという体験が重なると、隠すことにあまり執心しなくなる。隠そうとして無駄なエネルギーを使わず、その分だけオープンな態度がとれるようになっていく。それが小規模なコミュニティーであればそこに「溶け込む」ということにつながっていくだろう。しかし、都会であっても、一般的な態度として普及しても決しておかしくはない。旅人を助ける地元の人の態度は、顔見知りや知り合いに対する態度ではなく、相手が誰であれ、発動するものとしてそこにあるものである。狭いコミュニティーだから実現できるというような条件は特にないのではないか。都会では誰もが身近な人間関係を周囲に持ちながらも、それ以外は互いに「旅人」である。繁華街の路上や電車の中の行きずりの関係までは拡張しなくとも、店側と顧客のような、相手を本当には知らないが、重要でなくもない関わり合いというものは無数にある。

同書の著者による「自殺希少地域」の観察は、都会風と農村風のコミュニティーの違いとか、人口集中地域と過疎地の違いなどで私たちがコミュニケーションのありようについて先入観として持ってしまいがちな区分を再考させるのに十分である。「自殺希少地域」の人たちは、コミュニティーの中で（衝突を

回避するためなり、互助的・互酬的な緊密な関係を築くなりするために）個人個人の区別や意思を曖昧化するようなコミュニケーションをしているのではない。むしろ反対に、自分は自分、他人は他人という強い自我を感じさせるような（都会の生活でも実現可能なような）コミュニケーションをしているのである。同書の著者が「自殺希少地域」のある島でインタビューした、別の島から来た若い男性によれば、その島の人たちは「ひとの話をきかない」という。

数年前に別の島からこの島に来たという若い男性と知り合った。彼の家に行き、島の話をいろいろと聞いた。彼はもうじき島を出るという。

「島に来て、鍛えられました」

何らかの理由があって地元からこちらに来てまた地元に戻る。彼はたくましくなったと言う。…〈中略〉…

「この島のひとたちは強い。自分をもっている」

私は、さぞ、優しいひとがたくさんいるとか、陰口などがほとんどないとか、そういう話を期待していたわけだが、彼の評価はそうではなかった。

「この島のひとたちは、人の話をきかない」

というのである。島が好きかと言うとそう言い切れないようだった。もちろん感謝もしているのだという。しかしとても苦労も多かったのだと。

「たとえば、自分が歌手でこういうひとが好きでと話したとします。その場では相手もいいねと言う。しかし興味がなければその音楽は絶対にきかない。これまでの人間関係だったらいいねと言ったら少しは聴いてみようかとみたいなことになるんだと思うんです。でも島の人は興味がなければ絶対にきかない」

相手に同調することはない。自分は自分であり他人は他人である。その境界がとても明瞭であるというのである。

「陰口なんかもよくある。噂話もよくある。あっという間に島中に広がる」

彼の話だけを聞いていると島には住みたくなくなってしまうが、これは彼が見た現実に対しての彼の感想である。私は彼の話を聞きながらひとつの答えに達しようとしていた。

自殺で亡くなるひとが少ない地域というのは、

「自分をしっかりもっていて、それを周りもしっかりと受け止めている地域である」

彼は別の文化の中で彼なりの価値観の中で生きてきて、そしてこの島で別の価値観と出会い、その中で数年を生き、そういう意味でたくましくなった、と言った。

彼はきっと、これからは生きやすくなるのだ、と思った(4)。

「自殺希少地域」、つまり人々がその中での生活に精神的に行き詰まったり追い詰められたりせずに、自分なりに生きる道を切り開き、見つけ出すことをしやすい土地では、ある種の均衡がとれているのである。そこではコミュニティーの中に暮らす人間や、外部から訪ねてきた人間（異物）を親切にというよりは、平静に受け入れる。ただし、見知った限りは無関心に放っておいたりはしない。時には困っていることを先読みして、過剰なほど親切であったりもするが、かといって人の自立性を奪うほど干渉したり、過保護にしたりすることもないような、（小さくまとめてしまえば）適度なバランスが大切であるということになるだろう。たとえ小さいコミュニティーであっても、それぞれの個人の生活上の問題を全部知り、それについて適切なアドバイスをしていくことなど、到底できるはずがない。それぞれの個人はその人の責任においてそれぞれの人生を生きていかなければならない。ただ、それを突き放して放っておくのではなく、人としての関心は強く維持しているのである。助けが必要と感じればできる限りのことはするし、それは助けを求めている本人の心の負担にならないように、むしろ過剰なほど「勝手に」援助をしたりするのである。

人の抱えている問題は常に何かしらあり、それは本人の見る角度でしか現れないものでもあり、最終的には本人が解決を見出していく他はない。ただ、そうだからといって、他の人の働きかけや、アドバイスや、理解の姿勢などが意味がないということではない。むしろ非常に必要であり、決定的に求められているのだとも言えるのである。ただ、アドバイスや理解がそのまま解決につながるとは限らない。そこでも不思議な反転があり、働きかけたりアドバイスしたりした人たちの理解力や考え方や思惑を超えたところで、解決に結びついたりするものなのである。

2　期待と現実とのギャップの中で

誰の人生にも何かしらの問題があるという前提でものを言っているわけであるが、そういう捉え方には一定の根拠がある。現代に生きる人間の根底の不安を説く思想は様々にあるかとは思うが、当面の考察には社会学者デュルケームが『自殺論』において見出した「アノミー」ということだけ指摘すれば十分かと思う。現代の社会がことごとくアノミー的な状況にあるというのは、近代に至って社会的な意味で自由が拡大したということとほとんど同義である。身分制社会が崩壊し、伝統的な農村的な共同体も崩壊した。宗教や伝統が人の精神を縛り付ける力

も衰退した。社会生活の諸分野の中で経済分野が着実に重要度を増していき、政治すらも経済発展を図るという至上命題の実現を最優先させざるを得なくなっている。そして経済的な分野は市場経済による競争的な環境が当然のことと考えられるようになった。以上のような指摘は、格別独創的な主張ではなく、現代社会ではすでに言い古され、常識化された事柄に属することだろう。宗教の位置づけなどに少々の異論はあり得るかもしれない。しかし、エマニュエル・トッドも指摘しているように、フランスにおいて宗教実践の衰退は着実に進行している。

　カトリックの宗教的実践の緩慢な衰退は、…〈中略〉…フランスではすでに六〇年代初頭の転換期に目についていた。カトリック信者で規則的にミサに行くと答えた者のパーセンテージは、一九四八年には三七％であったのが、一九六八年には二五％、次いで一九八八年には一三％にまで減少した。二〇〇七年には八％に落ちている。調査対象は、一般に自分の実践レベルを高く見積もるものであるから、実際の比率はもう少し低くなるはずである。二〇〇七年の八％は、おそらく現実には五％を少し切るぐらいのところになるだろう。しかもその多数はすでに老齢に達した者である。一九四八年の全国平均三七％というのは、カトリックの浸透度が高い周辺部諸州では、五〇％をはるかに越える多数派的実践を意味していたことになる。…〈中略〉…

　フランスでは人目につきにくいが、文明の衝突よりさらに古い理論が、イスラームを問題として名指すのに貢献している。それは、一九八五年にマルセル・ゴーシュが提示した、キリスト教は「宗教から抜け出す宗教」であるという理論であるが、その後これを活用する者たちはこれを単純化し、イスラーム圏を攻撃する武器として転用するに至った。すなわちキリスト教は、自分自身を超出する力を持つがゆえに他の宗教とは異なる、というのだ。この歴史観は、西洋世界に、実際は存在しない独自性を付与するものである。そのことを確かめるには、イスラームについて考察するまでもない。日本は、明治初年に始まった宗教危機以前は、本質的に仏教国であったが、今日ではヨーロッパと同様に、いかなる宗教的信仰にも無関心である(5)。

　現代の日本社会においては、新興宗教やカルトへの関心の高まりという問題はあるにせよ、特定の仏教なら仏教という宗教的信仰が強い「宗教的実践」を伴って社会に共有される状況にはない。あるいは、アメリカ社会では日本やフランス以上にキリスト教の宗教的実践がなされているという可能性もある。あるいはイスラム圏では国によってはまだまだ人々に強力な精神

的影響力を振るっているのかもしれないが、話を日本社会などに限るとすると、宗教に対する関心が一般に強いとはとても言えないし、フランスの例でも明らかなとおり、（トッドの逆を指摘することになるが）日本が世界から孤立しているわけではない。

その結果として個人の存在はどうなってしまったかといえば、少なくとも、数々の自由な選択の前に立たされることになったということは間違いなく言える。身分制が完全に崩壊してしまった以上、個人は個人として扱われる他はない。もちろん、個人を純粋に個人として扱うことに障害が全くなくなったと言えば言い過ぎかもしれない。現代社会に残存する様々な形の差別の構造を問題にすることは、それはそれで重要である。差別とは、論理的には、個人を決して単なる個人として見なさないから成り立つものである。個人ではなくて、例えば肌の色や性別という「集団」の一員として人を見るということがあるから差別が起こるのである。そうでないなら「差別」というものは成り立ち得ない。そして事実、現代社会のあちらこちらには、まだ陰湿な形で差別の構造は残存しているだろう。ただ、現実は理想通りにはいかないとしても、それなら差別は正当なものかと問うたときに、真剣に差別の必要性を主張するということは、現代では誰にとってももはや不可能であろう（移民の制限の声の高まりを排外主義や人種差別の文脈で語る論者もあるが、それはむしろ政治的言説というべきものであろう。移民問題で問われるべきものがあるとすれば、人種や民族の差別ではなく、近代的な国民国家の枠組みである）。そして、様々な努力を通じて差別の構造が少しずつ影薄くフェードアウトしていくものであるとすれば、それは、差別から（現状よりも）解放された個人を、さらに現状よりも多様な選択肢の前に立たせるということになるのは確実である。「集団」の一員として扱われないで「個人」として扱われるということは、何を実現するのも本人次第。本人の選択や努力や考え方などに応じてそれぞれの人生が決まっていくということにならざるを得ない。

自由の余地が少なかった社会の「利点」といえば、まさに人生に選択の余地が少ないということなのである。その分だけ、つまり身分や伝統や慣習に縛られていればいるほど、個人個人の存在は安定したものとなる。少なくとも、人は自分の境遇を疑ったり否定したりすることがあまりなくなるのである。社会的なポジションが高くても低くても、社会が一定の安定を保っている限り、そのポジションは変動しにくいものとなり、そしてそうであればあるほど、それぞれの人間には社会の中に確固とした居場所があることを意味する。もちろん近代以前の社会は、例外なく現代の経済先進国の生活よりも貧しいし、それだけ（そういう経済面での、あるいは公衆衛生や平均寿命という面での）人生は厳しかったかもしれない。しかしながら、少な

くとも、近代以前において、人は自分の社会的な位置づけについて、迷うことはなかったのである。現在の社会では決してそうではない。

率直に自問自答すれば誰もが理解できると思うが、現在地点で、自分の社会的ポジションは何によって決まり、支えられているかといえば、自分の実績（学校の成績から仕事上の成果に至るまでのもろもろの事柄）というほかはない。どういう親の子どもか、どういう階級の出身か、ということが問題にならない以上、あとは個人の「メリット」しか残らない。「メリット」とは、突き詰めて言うなら、他人による自分の評価である。学校の先生や職場の上司・同僚などがいかに自分を評価するかということが「次」につながっていく。評価のポイントや基準は様々かもしれない。しかし試験にせよ面接にせよ、日常の振る舞いにせよ、本人以外の誰かが、その人を評価して、それが社会的な立場に反映されることになる。そのような構造が、現代社会にはある。また、そうでなければ社会意識の中でもはや公正とは感じられないだろう。例えば、社会に存在する様々な差別を問題にする人は、論理的には、本人の「メリット」で人を評価せよ、と主張していることになる。「肌の色や性別のような、本人の努力ではどうしようもないことによって人を判断するのは公正ではない」と主張するということは、人を判断するのは「本人の努力」で何とかなるものでなければならないということである。勉強の成果であったり、仕事の実績であったり、人間関係をうまく形成していって、周囲の信頼と支持を得ていくことであったり、いろいろなケースがあるにせよ、総じて「本人の努力」で変わってくる「あるもの」が問題なのである。

「私はとにかく運がよかった」という人もあるだろうが、「運」だけで安定的な社会的ポジションはつかめないであろう。最低限それを下支えする実績（他人からの評価）が自分になければ、「運」を生かすこともできない。

今のところ、自由と引き換えに現代人が得たものは、他人の評価に支えられた自分の社会的な位置づけなのである。社会というものが組織化され、構造化され、複雑な「システム」となればなるだけ、それぞれの位置に個人をどのように振り分けるかが問題となり、現代社会の回答は「それは、個人個人にどれだけのメリットがあるかということによる」というものである。現代の社会正義の基本のひとつは、ふさわしい地位にふさわしい人が就いているということであり、それは、その人が受けている他人からの評価に基づくほかはない。（差別等の問題を克服するなどして）そういう社会正義が実現されればされるほど、個人個人は他人の評価に支えられている自分を意識せざるを得ない。

一見すると、「メリット」はただ単に社会編成上のポジションの問題のように見えてしまうかもしれない。政府組織でも企

業組織でも、その他の団体でも、「誰をどのようなポストに就けるか」という配置の問題に直面せざるを得ず、現代では社会正義にかなった方法として、「メリット」についての評価を基準にするという考え方が基軸になるが、厳密にそれだけであれば、職場をいったん離れれば、「自分は自分」と言える。しかしながら、身分や地縁共同体や、宗教的共同体の中に包摂されない個人にとって、職場を離れたからといって、戻っていく場としては、家族や友人・知り合いなどの親しい人間関係だけである。そこで個人個人の存在を支えるものは、家族や友人の絆、他人に（例えば話し相手として）認められること、他人に（話の分かる人間として）評価されることなどになってしまうのではないだろうか。厳密に「それだけ」かどうかは分からないが、職場や様々な意味での社会的地位などとは評価軸は異なるかもしれないとしても、やはり他人に認められ、承認されることが重要になってしまう。「何をやってもダメ、誰も相手にしてくれない」と客観的に言えるかどうかはともかく、本人がそう確信してしまえば、生きていくことの立脚点が見失われてしまう。

例えば大学入試に失敗することが、本人にとって大変なショックになり得るのは、そういう状況が背景となる。高校時代の周囲の評価と入試結果に大きなギャップを生じれば、それだけ衝撃は深刻な打撃となるだろう。なぜなら、私たちの社会的ポジションは他人の評価によって決まり、この場合は試験の結果で決まると感じてしまいやすいからである。入試に失敗したという場合、そのような「格下げ」の状況は、他人の評価でしか自分を支えられない現代人にとってはまことに辛いものである。ここでも、入試の客観的な成功や失敗自体が問題なのではない。受験前の自分に対する周囲の評価（そして、それに由来する自分の自分に対する評価）とのギャップが問題なのである。勉強が苦手と自他共に認める人間が、相応の失敗をしても、自分も他人も当然と受け止める余地がある。問題は「格下げ」なのである。言い換えれば、自分が「期待」していた事柄が「現実」によって崩壊すること、または期待と現実とのギャップが現代人に大きな苦痛をもたらすのである。

もっとも、狭い意味での「他人の評価」だけが辛いギャップをもたらすとは限らない。他人の評価とは別に、自分の人生に対する無意識の「期待」というものが自ずとあるからである。勉学や仕事の実績だけの問題ではない。突然の事故などで身体に障害を持つことになった時点の衝撃なども、一般的にはたいへん大きいものとなる。健康で障害のない身体で実現できたかもしれない楽しい暮らしの多くを断念せざるを得ないということは、人生に対する「期待」と、直面せざるを得ない「現実」との大きなギャップに見舞われるということなのである。自己の基盤が掘り崩されてしまった現代人にとっては、それは

ひとしお耐えがたい経験となってしまう。深刻な病気を宣言された場合も同様のことが起こる。高齢者の健康への懸念にも、「期待」と「現実」とのギャップに対する不安が潜んでいると考えられる。健康な身体がどこかしら害される衝撃は、実際の苦痛や不都合以上に現代人にとって苦痛なのである。

就職や結婚の失敗なども、人生への「期待」が裏切られたと感じられた場合、大きな衝撃をもたらすと考えられる。「人並みの人生」から脱落してしまったというような感覚といっていいであろう。他人と比較して自分の人生を眺めることはあまり賢明なことではない、という良識も、まことにもっともではあるが、自由と引き換えに自己の基盤がこのように脆弱化してしまった現代人にとって、ちょっとしたきっかけで自分の人生が「失敗」だったと感じることは、よくあることなのであり、それは現代人の置かれている自由な社会の環境においては、一定の確率で人が見舞われる心理となっているとも言えるであろう。私たちはそのような衝撃に対してある種の気構えを持つようにして、現代社会に適応していく必要があるのではないかと思われる。

私たちの常識的な観念では、人生の成功こそ望ましいものである。ところが、期待とギャップの図式で考えてみれば、何らかの意味で成功するということは、人生に対する期待が高まるという意味では、失敗の可能性を高めていることになる。日頃60点の点数をとる生徒は、成績が60点前後であれば「普通」と思うだろう。しかし、努力するなどして成績を向上させて日頃80点の点数をとるようになったとしたら、70点はもう失敗ということになる。80点が平均値となると、成績への期待が自然に高まっていってしまうからである。これは単純な例であるが、人生における成功が、人生をかえって脆弱にしてしまうということを分かりやすく示すものである。それがわかったからといって、成功を望まないでいることなどはできないだろう。積極的に成功を勝ち取らないまでも、「人並み」という感覚がすでに苦悩の種をまいているともいえる。「人並み」から転落してしまうことが苦痛となってしまうからである。典型的には健康が損なわれたり、大けがをしたりするような場合である。健康を失ったときの苦痛のかなり大きな部分は、「人並み」でなくなったことについての悲しみである。

アダム・スミスが二五〇年も前に書いていることが、現代にも通じる洞察となっている。

> 人間本性の構造からいって、苦悩は決して永遠のものではありえない。もし人が苦悩の発作に耐えて生き続けるならば、彼はまもなく、何の努力もなしに通常の平静さを享受するようになる。木の義足をつけた人は、疑いなく苦しむし、自分が生涯、非常に大きな不便を被り続けなければ

ならないことを予見する。しかしながら、彼はまもなく、その不便を公平な観察者たちがそれを見るのとまったく同じように見るようになる。すなわち、彼は、そのような不便を背負っても、一人でいるときに得られる普通の喜び、そして仲間といるときに得られる普通の喜びを、ともに享受できると考えるようになる。彼は、まもなく自分自身を胸中の理想的な観察者と同一視し、彼自身が自分の境遇についての公平な観察者になる。弱い人がはじめのうちはそうすることがあるのと違って、彼は、もはや泣かないし、嘆かないし、悲嘆にくれない。公平な観察者の見方が完全に習慣的なものとなるため、彼は、何の努力もなしに、自分の悲運を、公平な観察者以外の見方で見ようとはしなくなるのである(6)。

障害のない身体でこれから先も生きるという「期待」と片足を失ったこと直面せざるを得ない「現実」との大きなギャップ。自由な人間として生きてきた人ほど、一時的にたいへんな精神的な苦痛に見舞われるであろう。しかし、時間が経つにつれて、人間は現実に適応する術を学ぶ。この点についてのスミスの信念は非常に強いものがある。スミスの言い方で言うなら、「公平な観察者」の視点で自分の境遇を眺めることができるようになる。そして、足が不自由になった以外の点で、自分が以前とさほど極端には違わない人生を体験できることに気がつく。友人たちと飲み食いしながら雑談に興じるようなとき、足の状態は本質的には関係がないのである。実際に、障害を持つ人たちが毎日泣き暮らしているわけではないことは明らかである(「かわいそうな人たち」という先入観で見ないようにしなければならない)。人生の楽しみは、障害の有無に関係なく訪れるであろう。そして、発想を変えて眺めてみれば、いわゆる健常者の生活であっても、何らかの「障害」は伴っているものである。お金が十分にあるのか、満足のいく仕事に就いているのか、そして、自分が自分を評価してほしい程度に他人が自分を評価してくれているのか…。考えてみれば、「上」を見ればきりがない。しかしそれでも、私たちの日常が不幸に閉ざされているということはない。誰もが人生の普通の楽しみをそれなりに享受して生きているのではないか。身体的、経済的、職業的、その他の条件の階梯を一段、一段上に登っていくとしても、登る前と本質的にはほぼ変わらない喜びや楽しみが待っているのではないだろうか。

「エピルスの王」の話として紹介されている内容は、興味深い。

エピルスの王の寵臣が王に言ったことは、人間生活の普通の境遇にうるすべての人びとにあてはまるだろう。王は、

その寵臣に対して、自分が行なおうと企てていたすべての征服を順序だてて話した。王が最後の征服計画について話し終えたとき、寵臣は言った。「ところで、そのあと陛下は何をなさいますか」。王は言った。「それから私がしたいと思うのは、私の友人たちとともに楽しみ、一本の酒で楽しく語り合うということだ」。寵臣はたずねた。「陛下が今そうなさることを、何が妨げているのでしょうか」。

空想の中の最も輝かしく最も高貴な境遇において、われわれが真の幸福を引き出しうると期待する快楽は、現実のつつましい境遇において、われわれがいつも手近にもっていて自由になる快楽と、ほとんどの場合、同じなのである。虚栄と優越感というつまらぬ快楽を除けば、最も高い地位が提供するあらゆる快楽は、最もつつましい地位においてさえ、人身の自由さえあれば、見つけることができるものである。そして虚栄と優越感の快楽は、真実で満足のゆく享楽の原理であり基礎である完全な平静さと、めったに両立しない。真実で満足のゆく快楽は、われわれが憧れる輝かしい境遇においては、われわれが熱心に捨て去ろうとする現実のつつましい境遇においてと同じ確実さをもって獲得されるとは限らないのである(7)。

友人と酒を酌み交わして楽しむということは、世界の征服者になろうとなるまいと、本質的には変わらない。それは、野望を遂げた満足感が付け加わったりはするだろうが、そういう条件がないと友人との酒がおいしくないということは、本当はないだろう。しかし、むやみに野望に囚われていたり、あるいは自分の野望が叶わないと思い知らされたりするようなことがあれば、王は友人と楽しむことが全くできなくなるだろう。それは（ちょうど片足を失った直後の心境のように）本人の考え方に責任があるのであり、「友人との酒」に何か良くない点があるわけではないのである。

同じ現実であっても、私たちの「考え方」によって、様々な受け止め方になるということは、疑いのない事実であろう。ということはつまり、前述のような「期待」と「現実」のギャップのような衝撃があったとしても、私たちが柔軟に「考え方」を変容させることができるなら、必ずしも私たちが絶望する必要はない、ということになるのではないだろうか。私たちの現実の見え方は、物理法則に従ったようなものとは違う。客観的には同様な現実が、私たちの「考え方」次第で、別の様相を示すのである。「期待」と「現実」のギャップに悩まされがちな現代人にとって重要なことは、時間がかかるとしても、「辛い現実」と見えたものを固定観念で捉え続けることのないようにしていくことなのである。当初は非常に辛いと感じた出来事を、「公平な観察者」の視点から見ることができるようになること

が肝心なことであり、そのように見方を転換する力は、誰にでも備わっている、というのがスミスの言いたいことであろう。なぜなら、私たちは「公平な観察者」の視点に身を置くことが、（少なくとも理論上は）いつでも可能なのである。

3　魚の眼で見る

「そう言われても、自分の見方を転換していくことは簡単ではない。方法が分からない」という声が聞こえてきそうである。ここからは、この問題を考えてみたい。

例えば私たちが四方を壁に囲まれた部屋の中で、壁に向かって直進したときに、壁は私たちの前進を阻み、容易で乗り越えがたい障害として立ち現れるかもしれない。しかし、そのような受け止め方は、実は人間の身体に備わった「自然な」見方から生じる先入観のなせる技なのである。ユン・ウンデの書いていることを見よう。

> 人の数だけ考え方はある。だから、特定の基準を設けて善し悪しをつけるなど至難の業のはずだが、「この考え方はいいが、あれはダメだ」といったことをしょっちゅう私たちは行っている。しかし、不思議なことに、そもそも、「そのものの見方は何が決定しているのか?」については、あまり考えないようだ(8)。

といっても、マルクス主義的な分析をここで持ち出すというのとは違う。なぜなら、「特定の基準を設けて善し悪しをつけるなど至難の業」であるだけでなく、ここでの問題は、社会や人間についての「真理」を見出すことではないからである。個人個人にとって壁として立ちはだかる問題に、いかに柔軟に取り組むか、個人的に絶望的と見える状況にいかに「Yes」と言うかということが問題だからである。ただし、V・フランクルが『夜と霧』でナチスの強制収容所について語るような、誰にとってもほぼ等しく、途方もなく困難に見える状況には焦点を当てていない。平均的な「公平な観察者」には名案が浮かばないような、そのような困難な状況に対しては、また（フランクルが見事にして見せてくれたような）それにふさわしい深い洞察が必要だろう。ここでは、期待と現実のギャップに直面した個人が、いかに社会一般の公平な視点、あるいは常識的な平衡感覚を取り戻すかということが課題となる。あくまでも、「公平な観察者」の視点に立ち戻り、人生の喜びがまだ自分を去ってしまってはいないという感覚を取り戻し、現実世界の豊かさを再び見出していくことが問題である。

私たちが世界のあり方について語り出すとき、そこには

常に「人間的なものの見方」という限定を表すタグがついているはずだ。人間は、鳥や虫や魚の視点で世界を捉えていないのだから。

それに気づいた途端、「人間的な視点」とは何なのか、ひどく気になってきた。鳥や虫や魚と人間の視点を分けるのは、知識の多寡ではない。そこでまず、魚はどういうふうに周囲を見ているのかを考えてみることにした。…〈中略〉…魚の眼は体側にあるので、視界に自分の体が映り込まないだろう。ということは、人間とは違って、自分と周囲の境目がはっきりしない可能性が高い。…〈中略〉…

これは、常に世界と自分とを分けて捉えている人間とは大きく異なる感覚だろう。もしかしたら、魚は「自分の体」という意識が、人間に比べてかなり希薄かもしれない。

そこで私は、紙に穴を二つあけて、自分の体が視界に入ってこないようなマスクをつくってみた。すると、自分の体が見えなくなったことによって、空間の認識は確かに変化した。…〈中略〉…マスクをつけると、自分の体が見えないものだから、「自分」という意識のせり出しが控えめになる。同時に、空間を秩序立てて見る力が薄まって感じられた。「ただコップを感じる」というような把握の仕方に変わったのだ。

ふたつめの発見は、こうして自分の体が映り込まないようにすると、視覚以外の感覚が鋭敏になるということだ。マスクをつけると、部屋の匂いや質感、音にならない音みたいなものが、気になるようになった。視覚の圧倒的な優位が崩れ、あらゆる感覚器官の声が聞こえるようになるのだ(9)。

紙に穴を二つあけたマスクをつけるという単純な仕掛けをしただけで、私たちのものの見方は変化してしまうという。魚の眼を完全に追体験することなどもちろんできないが、ここで重要なことは、私たちの先入観、固定観念が非常に強固のように見えて、実はそう大したものではないこともあるという事実を確認することである。自分の体が視野に入るかどうかという程度の条件を変更するだけでも、すぐに変化してしまうのである。例えば私たちの前に立ちはだかる壁についてである。

マスクをつけてみていちばんおもしろかったのは、立った姿勢で壁に向かって進んだときだ。

通常、壁みたいな自分の行く手を阻む物に近づくと、胸のあたりが詰まるような圧迫感が高まる。満員電車の扉近くに立っていて、もうこれ以上は入れないと思っているのに、それでも果敢に乗り込もうとする人が接近するときのあの感じだ。けれども、マスクをつけたら、ほとんど圧迫

感を感じなくなったのだ。

マスクをつけると、壁は空間を構成するただの一要素になった。もちろん、どんどん前に進めば壁にぶつかるのは変わらない。物理的にすり抜けることもできない。しかし、接近しても圧迫感が生まれない。これはどういうことなのか。

視界に自分の体が映り込んでいるときに、目の前に壁が現れると、自分と壁との関係だけに注意が集中してしまう。それがプレッシャーを生むのではないか。そのとき意識は前方だけに囚われている。

しかし、マスクをつけると、前方の壁だけに気をとられず、頭上、足元、横、後ろに自由な空間が広がっていることを体感できた。「前」という方向は、別に壁に向かって固定されているわけではない。くるりと転身すれば、どこでもそれが前になるはずだ。私が向かう先が前で、それはいつだって自分次第なのだ。自分の周囲にはいつも空間が広がっているのだから、本当は自由に動けるはずだ(10)。

私たちは、（目が見える場合に限ってだが）前方に囚われてしまいがちである。こんなことは、指摘されれば当然のことなのに、普段はすっかり忘れている。だから前方から壁が迫ってきたと感じると、空間がどんどん狭まっていくという観念に囚われて圧迫感を覚えることになる。しかし、前方以外にも（視覚とは限らないが）注意を向けることができれば、空間は上下左右、そして後方に、いくらでも広がっているのである。仮にそちらの方にも均等に注意を払えるのであれば、前方から接近してくる壁にむやみに圧迫感を覚える必然性はないのである。あるいは、「くるりと転身すれば」、私たちの前方に広がる空間を存分に認識できるはずである。魚なら、上下左右に転身できるであろうし、実際、水槽に入れられた魚が圧迫感を覚えているようなそぶりは見られない。諦めて泳ぐのをやめたりもしない。彼らは壁に向かって泳いできては簡単に転身し、身を翻して壁を当たり前のように楽々と回避しているのである。

壁というのは、もちろん私たちが直面する様々な困難の象徴である。物理的な壁が、前方にばかり気をとられているために圧迫感をもって立ちはだかるように見えるだけだとしたら、日頃乗り越えがたいと感じるような困難に象徴される「壁」も、単に私たちの先入観のために「立ちはだかる」ものに感じられているだけなのかもしれない。

そのことに気づいたとき、妙に自信が湧いてきた。腹の底から力がみなぎってくる類の自信だ。それは、「これもできるし、あれもできるようになったし、この前も大丈夫だったから今度もきっとうまくやれる」と頭で確かめるよ

うな心細い自信ではない。

私たちは、何かをすれば、何かを知れば自信がつくと思っているけれど、それはかなり見当違いなのかもしれない。新たに何かを獲得するべく努力するよりも、身につけてしまった思い込みを外しさえすればいいのではないか。

それに、いざというときに、得たものを確認してから行動を起こすのでは、全然いざという緊急事態に間に合わない。思い込みを外しておけば、いつだって楽々と動ける。自信のなさは人から自由を奪う最大の枷かもしれない(11)。

4　結び

私たちの「思い込みを外して」くれるものは何か。例えば、この引用の文章そのものであるとも言える。つまり、他者の（できれば柔軟で知恵に満ちた）物の見方に触れることが私たちの先入観を相対化してくれるのである。私たちの日常の意識は、「思い込み」の宝庫である。自分でも何が現実に即した見方で、何が「思い込み」であるのか区別がなかなかつかない。私たちをそこから脱出させてくれるものは、まずは他の人間の見方、他の人間の知恵であろう。

相対的に知恵のある人間という存在もあるが、私たちの「思い込み」は、「期待と現実とのギャップ」を含めて非常に個人的な性格が強いことを思えば、誰であれ、私たちと少し考え方の異なる人間の考え方を知れば参考になると言えるのではないか。スミスの言う「公平な観察者」というのは、社会の人々の中に普遍的に存在していると考えられる良識、健全なものの見方という意味に受け取ることができる。足が不自由な人というのは、良識と健全なものの見方に従えば、ただ足が不自由なだけで、もちろん人間的な喜びから見放された存在などではない。「自分は足が不自由になってしまった」と嘆く人は、無理もないことではあるが、社会の良識とのコミュニケーションから一時的に隔絶されてしまった存在である。通常私たちはは「時間が解決する」という言い方をするが、それは「苦悩の発作」が収まるとともに、周囲の人間とのコミュニケーションが回復して、自分の境遇を冷静に受け止める視点が獲得できるという事態を表わしている。

「自殺希少地域」が促すものは、この種の、「思い込み」を取り払うコミュニケーションであると考えられる。人が自殺に追い込まれるという場合、その人が「公平な観察者」に近い見方をしているということはあり得ない。それでは社会に生きる人間がことごとく自殺してしまう。個人的事情は様々でも、やはりそれはスミスの言う「苦悩の発作」であり、何らかの原因で（典型的には前述のように期待と現実とのギャップなどによって）「公平な観察者」から疎外され、コミュニケーションが絶

たれてしまって、自分の直面する現実を再解釈する柔軟性を失ってしまっている状態と考えられる。つまりは、乗り越えがたい壁に直面していると本人は感じて、他の見方ができないままに絶望していくと考えられる。

しかし、客観的に見れば、自由な社会であり、豊かな社会なのである。『夜と霧』のような状況などめったにあるものではない。現在の日本社会において、強制収容所のような絶望的な状況というものがそこら中に存在していると考えるのは合理的な想定とは言えない。もちろん、苦悩がリアルでないと言いたいのではない。受験の失敗や、スポーツチームでレギュラーを外されたりしたときの苦悩にしても、特に年少者には非常に辛いものでありうる。失業や仕事上の失態であっても同様だろう。いじめやパワハラも後を絶たない。ただ、そうであっても、強制収容所のような絶望的状況とは全く比較にならない。苦悩する本人には直接は通じない（あるいは直接告げるべきでもないかもしれない）が、「なんだ、それぐらい」という見方はほとんど常に可能なのである。社会には、そのような見方ができるような人間が常に多数存在している。両者の見方を橋渡しは、可能なはずであるし、時間はかかっても、橋渡しする価値がある。スミスの言うように苦悩は一時的なものであり、本人の現実の解釈の仕方の問題であり、本人が現実の見方を変えることで乗り越えられるものが大半なのである。コミュニケーションを回復する道筋が重要である。

「自殺希少地域」を歩き回った著者の言葉がリアリティーを持って迫るのはこのためである。「自殺で亡くなるひとが少ない地域というのは、自分をしっかりもっていて、それを周りもしっかりと受け止めている地域である」。職業のことなどを隠さずに「言わされる」ような地域であり、「異物との対話にとても慣れている」地域である。そして人の苦境をすぐに理解して押しつけるようにして支援する地域なのである。単純にオープンな対話があるというだけではなく、苦悩が見過ごされず、必要とあれば自分の意思を押しつけるようにして介入するような地域なのである。そのような環境では、個人個人が自分の狭い思考に囚われたまま放置されることは少ないに違いない。

現代社会を生きるということは、少しのきっかけですぐに不安定化するような自己を抱えて生きるということにならざるを得ない。そうだからといって、自由で豊かな社会を否定することは不可能である。そうであれば、私たちは柔軟な現実の見方を絶えず失わないように努めるほかはなく、その有力な手段が、現実に豊かな意味を付与する私たちの優れた能力を、お互いに交換することでさらに強化していくことである。すなわち「自殺希少地域」がひとつのモデルを示してくれているような方向でコミュニケーションを活性化することであり、これが現代社会の切り開いた可能性をさらに前進させていく条件であると考

えられるのである。

注

（1）森川すいめい『その島のひとたちは、ひとの話をきかない』青土社二〇一六年　一五六―一五七ページ。
（2）同書、一〇一―一〇二ページ。
（3）同書、一三六ページ。
（4）同書、一六一―一六三ページ。
（5）エマニュエル・トッド『デモクラシー以後』藤原書店二〇〇九年　四一―四二、六一ページ。
（6）アダム・スミス『道徳感情論』（上）岩波文庫（訳文は、堂目卓生『アダム・スミス』中公新書二〇〇八年　二八〇ページ。）
（7）堂目卓生『アダム・スミス』中公新書二〇〇八年　二八二―二八三ページ。
（8）尹雄大「ユン・ウンデ」『体の知性を取り戻す』講談社現代新書二〇一四年　一四六ページ。
（9）同書、一四六―一四九ページ。
（10）同書、一四九―一五〇ページ。
（11）同書、一五〇―一五一ページ。